

— 長崎奉行 服部長門守常純 —

〔環境科学部 若木太一教授〕



長崎大学附属図書館蔵 番号:17-30 写真サイズ:縦8.5cm×横5.5cm モノクロ

写真は服部長門守常純(一八一五〜一八七九)。この写真はフェリクス・ベアト(Felix Beato)撮影の肖像写真である。ベアトはイタリア系のイギリス人で一八六三年(文久三)ころ来日し、長崎を訪れ、上野彦馬と交流があった報道写真家である。一八八四年(明治一七)に離日している。撮影年月は特定できない。

〔幕末動乱の中の長崎奉行〕

写真は服部長門守常純(一八一五〜一八七九)という幕末動乱期の百十七代長崎奉行として赴任した人物である。奉行のなかでも地味な存在であるが、実は「竜馬がゆく」や「翔ぶが如く」などの幕末から明治へ(一八六八〜)

と移りゆく波瀾万丈の時代に活躍した人物である。

服部は一八六三年(文久三)四月二十日に任せられ、金十枚、時服三枚、羽織を頂戴して五月に赴任した。小納戸役からの役替えである。おなじく長崎奉行支配調役に松本三之丞(さん)が任じられた。また五月二十六日には

大村藩主大村純熙が命を受け、八月に惣奉行に任せられている(CHOH O12号参照)。時は「蛮夷掃攘」の命を受けて一橋中納言が急ぎ関東へ向かうといった、いわゆる幕末の風雲急を告げる時代である。

〔人々へ文武の門を
数多く開いた常純〕

服部は赴任直後のこの年七月、それまで恒例とした奉行、組頭への八朔銀を辞退するなど儉約につとめ、またコレラの流行に対して養生所のポンペの後任として着任した医師ポードウイン(一八二二〜一八八五)の提言による「これら養生法」を公布した。この養生所は一八六五年(慶応元年)に「精得館」と改称された。

また服部は「乃武館」という武術道場を片淵に設置し、地元の役人や民間人へ文武を奨励し学ばせた。同年十二月には梅香崎の海岸を埋め立て、外国人居留地に組み入れた。この「乃武館」は役人を対象とした

が、一般にも開かれた学問所で、英語伝習所もここに移し英語所とした。また、翌一八六四年(元治元年)、江戸町にあった語学所(洋学所の後進)を大村町(現在の万才町)に設置し、英語、フランス語、ロシア語を教えさせた。同年八月、これをあわせて新町(現在の興善町)に移し、「済美館」と改め、外国の書籍の購入などもここで行った。一八六六年(慶応二)、服部は軍艦を購入し、長崎奉行所の管轄とした。艦は「回天」と命名された。プロシア軍艦を改修した一八五五年建造の旧式であった。艦長は長崎奉行所の組頭柴誠一で、長崎海軍伝習所にて研修した役人たちが乗組員として活動した。これは後に幕府の軍艦として徴用された。

服部は一八六六年(慶応二)八月十二日、任を解かれ幕府の勘定奉行として帰府した。その後海軍奉行などを経て大政奉還後は静岡県大参事、修史局編纂員、学習院教授などを歴任した。一八七九年(明治十二)没、享年六十五であった。